



Title	パウロ・オノーリオの「声」を解剖する：グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』における語りの翻訳を巡って
Author(s)	岐部, 雅之
Citation	ブラジル研究. 2026, 20, p. 45-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106121
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パウロ・オノーリオの「声」を解剖する —グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』 における語りの翻訳を巡って—¹

岐部雅之²

はじめに

翻訳という営みは、ある言語から別の言語へと置き換えるだけに留まらず、同一言語内においても時には不可避なものとなる。本稿で取り上げるブラジル人作家グラシリアノ・ハーモス (Graciliano Ramos: 1892-1953)³の小説『サンベルナルド (São Bernardo)』(1934年)は同国北東部地方のアラゴアス州を舞台としており、主人公パウロ・オノーリオの語りには固有の方言が散りばめられ、ブラジル人であっても他地域の出身者であれば馴染みのない表現に目を丸くする。ハーモス文学の3作品(『カエテー族 (Caetés)』(1933年)、『サンベルナルド』、『乾いた人びと』(1938年))を語彙意味論的に分析したマリーニョの博士論文に語彙注釈の章が設けられていることから、一般的な外国語辞典レベルでは歯が立たないことが窺える。すると、『サンベルナルド』を外国語に翻訳することも当然ながら一筋縄では行かない。同小説の英訳(1975年版)を考察したコスタの言葉を借りれば、オノーリオが話す“ポルトガル

語の声”を“外国語の声”でも聞き取れるようにすることは、「グラシリアノ・ハーモスの翻訳者にとってはまさにヘラクレス的な仕事に違いなく、(中略)小説『サンベルナルド』はその典型例である」(Costa 2008: 165)と言える。それでも、『サンベルナルド』は1960年代にドイツ語やフィンランド語、ハンガリー語を皮切りとして、1980年以降もフランス語、スペイン語、イタリア語、オランダ語に翻訳されてきた。なお、英訳は2019年に旧訳とは異なる訳者によって新訳が出版されている。

この小説の翻訳に関して興味深いのは、2006年にバイーア州立大学文学部で開催された第9回応用言語学セミナー&第6回翻訳セミナーである。そこでは『サンベルナルド』のドイツ語訳、スペイン語訳、フランス語訳、英訳、イタリア語訳を巡るラウンドテーブルが行われ、研究会のメンバーが議論を交わした。その成果として発表された各研究論文は本稿を執筆する出発点となり、『サンベルナルド』を日本語に翻訳する過程でも適宜参照した⁴。

翻訳者らにとって否が応でも意識せざるを得ないのは、翻訳ストラテジーとしての同化翻訳と異化翻訳である。これは翻訳理論家ヴェヌティが唱える概念で、翻訳する側の文化や価値観に溶け込ませて翻訳するか、あるいは翻訳される側の文化や価値観を維持させて翻訳するか、と敷衍することができる。たとえば、日本語文学に出てくる「昭和」や「平成」といった年号を目標言語において「西暦」で翻訳するのは同化翻訳⁵に相当し、「いらっしやいませ」を“*Irasshaimase*”などとするのが異化翻訳⁶となる。したがって、『サンベルナルド』の翻訳に即して考えれば、ブラジル北東部文化にしかないものをどの程度まで自文化へ受容させるのかという倫理的問題と向き合わねばならない。「翻訳には 同 ^{ドメスティフィケーション} 化 がつきもの」(ヴェヌティ 2022: 18)と指摘しつつも、「翻訳は自文化中心的な暴力を加え、差異を抑圧もしくは消去する危険を孕んでいる」(ヴェヌティ 2021: 440)との警告は傾聴に値するものであろう。しかし一方で、エリザベッチ・ハーモスは次のとおり述べる。

複数の言語が同じ一つの現実を表現するほど十分に類似しておらず、

また現実が言語から独立して存在するわけではないが、翻訳は非常に重要かつ不可欠な営みであり続けている。これが逆説的な過程の産物であるのは、差異を削れば削るほど、その差異が一層際立つからである。(E. Ramos 2008: 159)

ヴェヌティにしても、エリザベッチ・ハーモスにしても、翻訳に潜む根源的な課題を問うており、これは数学の方程式のようにには解けない。

さらに、本稿においても一つ鍵となるのは役割語の概念である。金水敏によって 2000 年に初めて導入された役割語の定義は以下のとおりである。

ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができる、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。(金水 2023: 203)

『サンベルナルド』の語り手は、「まず断っておきたいのは、私の名はパウロ・オノーリオで、体重は八十九キロ、聖ペドロの日の頃に五十歳を迎えたことだ。年齢、体重、白髪交じりの太い眉、髭に覆われたこの紅潮した面相は相応の威厳をもたらしてきた」(Ramos 1953: 13) と自身を評している。では、彼はどのようなキャラクターを持つ人物だと捉えられるだろうか。換言すれば、どのような枠に嵌めれば日本語で「らしさ」を出すことができるのか。パウロ・オノーリオは貧困層から農園主へと成り上がった男で、家父長的な権威を振りかざしながら女性や使用人を支配し、文学的な教養を蔑み、農業や牧畜などの実学志向を標榜している。荒々しい性格の持ち主であることは確かである一方、初めは「金髪の女」として登場するマダレーナとの結婚前や彼女の死後に神妙な面持ちで自伝執筆を決意する場面などでは異なる

一面を見せる。また、マダレーナをはじめとする女性登場人物の言動については、「女ことば」の扱いにも目を向けなければならない。

以上の点を踏まえて、本稿ではパウロ・オノーリオの「声」を中心に『サンベルナルド』における語りの翻訳を巡る問題について考察すると同時に、「パウロ・オノーリオは日本語で語れるのか」という問いに対して、共訳者の一人として「語れる」と主張できるよう取り敢えずの答えを出そうというのが目的である。第1章では、『サンベルナルド』を翻訳することの難しさに焦点を当て、言葉に対するグラシリアノ・ハーモスの拘りに迫る。第2章では、先行研究で取り上げられている北東部地方に固有の慣用表現について、小説の冒頭4章分を対象として英訳等ではどのように翻訳されているのかを整理する。そして第3章では、パウロ・オノーリオの「声」を求めて、英訳との比較を通じて人称や文末表現を考察する。それと併せて、妻マダレーナの「声」にも言及したい。

1. 言葉に対する拘り

グラシリアノ・ハーモスは北東部アラゴアス州の内陸にあるケブラングロ市で生まれ、伝統的で厳格な家庭のもとで育てられたこともあり、階級や権威に対する敬意を早くから学んだ。文学に親しむようになったのは10歳頃からで、ジョゼー・ジ・アレンカール (José de Alencar: 1829-1877) やジョアキン・マヌエル・ジ・マセード (Joaquim Manuel de Macedo: 1820-1882) ら国内文学の作家を手にとった。間もなくオリジナルの短篇小説を書き始めたり、ラテン語、英語、フランス語、イタリア語を独学で学んだりした。語学学習が進むにつれて海外文学への関心も募らせたが、20代半ば以降は父親が経営する布地販売店を手伝わざるを得ず、創作活動はまともにできなかったという。32歳のときには実存的葛藤に苛まれ、「深刻な障害に直面している。四方八方に敵対者がいるように目に映り始め、自殺願望を持った。自殺したと本当に思うくらいに。これはそう馬鹿げたものではないようだ。預金口座、日記、仕事に関わるものを手放し、犯罪社会学に没頭した。何が私をそこへ駆

り立てたのか。私に付きまとう亡霊を殺したかったのだろうか」(Moraes 2012: 55-56) と鬱症状を患っていた。そんなハーモスを救ったのが文学であり、のちに『サンベルナルド』と『苦悩 (*Angústia*) 』(1936 年) へと昇華される短篇をこの時期に執筆している。作家として世に出るのは 1933 年の『カエテー族』からであるが、20 代から 30 代にかけての内省的な苦悩は彼の作品の種になったと言えるだろう。

こうして 1930 年代に活躍した北東部地方主義作家の一人として知られるグラシリアノ・ハーモス文学の独自性は「洗練された文体、言葉選びの豊かさ、リアリズムの鋭い批判力、心理描写の濃密さ」(Moraes 2012: 75) にある。そこで、ミランダは『サンベルナルド』を引き合いに出し、言葉の問題は同時代の作家や国内文学の伝統との関係において、ハーモスの作品を位置付ける決定的な要素であると見なした (Miranda 2004: 25)。この小説は、主人公パウロ・オノーリオを語り手とする一人称小説であり、嫉妬に狂った言動により妻マダレーナを自殺に追い込んでしまう悲劇的結末などが告白体形式で綴られたものである。1920 年前後から 1930 年革命を経た数年後までを時代背景とし、家父長制という旧来の価値観から抜け出せずに人生の意味を失った男の悲痛な思いに胸が衝かれる。果たしてパウロ・オノーリオに妻を疑う正当な理由があったのか。妻は不貞行為を犯していたのか。オノーリオの病的な嫉妬だけが妻を自殺へと追いやったのか。こうした正解のない数々の疑問は物語を解釈する上で極めて重要なものと言える。文学批評家モイゼスは、『サンベルナルド』は構造的には内省的かつマシャード⁷的な小説で、心理面及び劇的次元においてはドストエフスキー的である」(Moisés 2000: 217) と評価した。グラシリアノ・ハーモス自身も妻エロイザ宛ての書簡で、熱帯の不器用なドストエフスキーになるだろうと批評家から評されたことを伝えているため、ロシアの文豪との比較は早くから行われていたと察せられる (Moraes 2012: 98)。それに、第一作『カエテー族』の悲観的な自然主義から第二作『サンベルナルド』の批判的かつ人道主義的なリアリズムへと小説家として飛躍的に成長したとされ (Moraes 2012: 85)、代表作『乾いた人びと』と並ぶ不朽

の名作となっていることも首肯できる。

グラシリアノ・ハーモスの主な文学的関心は、セルタン（sertão）と呼ばれるアラゴアス州内陸部の社会的矛盾や暴力、そこに生きる人間の心理面の描写にあるが、文章表現に対する拘りには尋常ならざるものがある。不必要なものを取り除くべく何度も書き直し、本質を射抜くのが彼のスタイルなのである。

言葉の使用に慎重な著者（引用者注：ハーモス）は、日中に書き上げていたものを夜になっていつも読み返し、文章を半分に落とそうとしていた。翌日また同じやり方で前日に落としていた“水気をさらに絞って”いたのである。こうして彼の作品群を貫く直截的かつ補足のない文が現れる。その文章は簡潔で、飾り気がなく、意図を伝えるのに不足はない。そこに過剰なものはないのだ。（E. Ramos 2008: 160）

『サンベルナルド』を執筆していた 1932 年の妻エロイーズに宛てられた複数の書簡においても、グラシリアノ・ハーモスらしさが見て取れる。同年 8 月から 10 月にかけて、彼は、小説の登場人物であるヒペイロ、アゼヴェード・ゴンジン、パジーリャ、マダレーナ、マルセラとのお喋りで多忙であることに触れている。そして、1932 年 10 月 8 日付けの書簡からは、推敲を重ねるハーモスの様子が伝わってくる。

重要な修正は終えた。いま作業をしているのは事務的なことで、語彙の置き換えや統語の変更といった些末なもの。ただそれにしても、働き過ぎだな。この間など、朝 6 時から夜中まで文机から立ち上がりもせず、『サンベルナルド』の連中と向き合っていたのだから。（Ramos 1982: 130）

翌 11 月の書簡では、幾分ユーモアを感じさせるような筆致で校正の進捗状

況について語る。

ロー（引用者注：妻エロイーザの愛称）、『サンベルナルド』は随分様変わりした。パウロ・オノーリオは素晴らしいぞ、いずれ君も分かる。厄介なことに用紙は埋め尽くされて、もう修正を書き込む余地はない。今日私が死んでしまったら、誰も読めないだろう。（Ramos 1982: 138-139）

幾度にも及ぶ内省的な対話によってグラシリアノ・ハーモスが目指したところは、ブラジルらしい言語の模索ではなかっただろうか。実際のところ、「国語（*língua nacional*）を形作ることは、作家と読者の立場から各々の方法で解釈を施す、対立的というよりはむしろ対話的な繋がり」の成果」（Miranda 2004: 26）と言われるように、『サンベルナルド』では冒頭からこの点が主題化されている。そこでは、パウロ・オノーリオが自伝の執筆を始めるに際し、農園の友人たちに声を掛け、各々の言語的適正に応じて作業分担を試みようとする。

シルヴェストレ神父は道德に関する事柄とラテン語の引用の担当だ。ジョアン・ノゲイラは句読点、綴り、文法規則を引き受けた。アルキメデスには植字を頼んだ。それから文体面では、『クルゼイロ紙』の編集者で社主のルシオ・ゴメス・ジ・アゼヴェード・ゴンジンを誘った。私は構想を練り、本書の中に農業と牧畜の基礎を盛り込み、諸経費を払って、表紙に自分の名を飾る手筈とした。（Ramos 1953: 7）

ところが、「私は統計学、牧畜業、農業、簿記に精通しているが、それらは文学には無用の長物でしかない」（Ramos 1953: 11）と吐露するように、文学や小説をたびたび過小評価し、結局は一人で自伝に取り組むことになる⁸。その後も、様々な場面で「ふざけるな。病院なら話は分かる。でも、こんなと

ころに図書館とは、何のために？ 毎月ノゲイラが小説を読むためだけじゃないか。文学のたわけが……」(Ramos 1953: 91) と声を荒げることがあれば、「重労働に耐えられるのか。到底できない。小説にかぶれて正気を失い、洗礼式の記帳でさえ覚束ないだろうに」(Ramos 1953: 177) などと周囲に嫌みをぶつける有り様である。

『サンベルナルド』にこうした言語の問題が横たわっているのも、ハーモスが原稿のポルトガル語を“翻訳したから”というのは興味深い。

『サンベルナルド』は書き上げたものの、君も見たとおり、ほぼ全面的にポルトガル語で書かれたものだ。今はブラジル語に置き換えつつあるけれども、それが一筋縄ではいかないブラジル語で、都会の連中の書物に出てくるものとはまるきり違う。言うなれば、田舎者のブラジル語。これまで知られていなかった表現に満ちて、自分でさえ存在するとは思わなかった美しさだ。私がかつて知っていたものに加えて、多くの言い回しを拾い集め、次々に書き留めている。父セバスチアン、オターヴィオさん、シッコさん、ジョゼー・レイチさんは自分にとっての辞書代わり。こうして、街中や喫茶店に集まる教養人らには全く理解不可能な文ができた。刊行された暁には、国語の形を整えて、定着させることに大いに役立つはず。300年後の私は古典になるだろうか。文法を勉強する無学な者たちは居眠りをしながら『サンベルナルド』を読み、パウロ・オノーリオの独白の中に秀逸な言葉遣いを探し求めるのだ。(Ramos 1982: 134-135)

グラシリアノ・ハーモスの伝記作家モラエスは、『サンベルナルド』が古典になるまでに300年も掛かるとは何と控えめなことか！」(Moraes 2012: 89) と感嘆符付きで述べ、「田舎者のブラジル語」を読者に届けた点と合わせて、初版からすでに評価は揺るぎないものであったとしている。いずれにしても、ポルトガル語はブラジルの言語ではないといったナショナリズムの問題を扱

っているのではなく、「田舎者」という周縁で暮らす庶民の言葉をブラジル語と呼んでいる。こうして綴られた『サンベルナルド』という小説が、どのような言語に翻訳されようとも相当な苦勞を伴うことは想像するに難くない。上記の引用部においてハーモスが語る困難さとは、「田舎者と教養人との間にある文化的差異から生じる」(Ramos & Bicalho 2008: 132) ものである。それ故、同化翻訳にしろ、異化翻訳にしろ、解釈を経たものは時に読者の戸惑いを誘い、翻訳者として板挟みの状態に置かれてしまうのである。

2. 北東部地方に固有の慣用表現

グラシリアノ・ハーモスが徹底的に追求した語り手パウロ・オノーリオの使う地域言語 (regionalismo) について、ポルトガル語と英語などの翻訳例を比較しつつ、日本語訳も併せて検討したい。『サンベルナルド』のスペイン語訳を考察したソウザによると、「翻訳者の側では、個人と同化し、その一部を成すかのような自然環境にとりわけ注意を払うべきである。直截的かつ率直で、感傷的な要素を一切排除した作家 (引用者注: ハーモス) の文体も同様に。それは小説の出来事が展開する環境とそこに生きる登場人物たちの個性と見事に調和している。北東部の人間の型、風景への言及、それに飾り気のない暴力的な語り手の文体そのものが、翻訳者にとって挑戦となっている」(Souza 2008: 154) と言う。北東部の域外において完全に等価なものがない以上、小説内の地域言語が「ドイツ語、スペイン語、フランス語、イタリア語、英語にどのように翻訳されているのか?」(E. Ramos 2008: 158) という疑問は至極もつともであろう。

それでは、英訳⁹の是非について吟味しているコスタの論考を中心に具体的な事例を見ていく。第1章から引用する。

[...], eu meteria na esfomeada Gazeta, mediante lambujem. Mas o optimismo levou água na fervura. [...] O mingau virou água. (Ramos 1953: 7-9/太字二重線は引用者による。以下同じ)

I had been kind enough to place in the tottering *Gazeta*. But my high hopes were dashed: [...] Everything's gone to pot. (Scott-Buccleuch 1975: 8-10)

この翻訳では“*esfomeada*”が“*tottering*”にされ『ガゼッタ紙』の置かれた厳しい状況が伝えられているが、“*mediante lambujem*”が落とされている。日本語訳では「経営に苦しむ『ガゼッタ紙』に金を握らせ、美辞麗句を書かせるつもりだったからだ」というように省略は避けた。次の“*levou água na fervura*”は一般的な慣用表現で、英訳でも同様の翻訳がなされていると言えるだろう。日本語訳では「(その楽観主義にも) 水が差された」として、原文にある「水」を文字どおり訳出した。3つ目の文は北東部地方ならではの表現であり、マリニーニョの語彙注釈では「“*dar em osso de minhoca*”を見よ」との指示を経て、当該部分では「(目標達成が失敗に終わること、実現されないこと、水泡に帰すこと、結果を何も得られないこと) (Marinho 2018: 80) との説明がある。仮に異化翻訳をすると「ミンガウが水になった」となると意味が伝わらないため、注釈をつけたり、等価に近い「甘いお粥」という表現を使うか説明的に訳したりしなければならない。英訳では後者の方法を採用したことが分かる。コスタは『「水」と対立する *mingau* という文化的事物の特徴を失わせている解決策」(Costa 2008: 168) と否定的な評価を下しているが、日本語訳の「お手上げだな」もまた批判の誹りを免れない。

続いて第2章からも幾つか引用する。ここでは英訳に対するコスタの不満の色合いが濃くなり、「翻訳者によるテキスト上の等価性を求める試みは、期待外れになっている」(Costa 2008: 168) と辛辣で、“*matuto*”、“*caboclos*”、“*períodos chinfrins*”を挙げる。英訳ではそれぞれ“*clodhopper*”、“*workmen*”、“*idle phrases*”に置き換えられているが、「*Clodhopper* は *matuto* の持つ純朴な田舎臭さというニュアンスが表現されておらず、*workmen* は *caboclo* のアイデンティティを明らかに弱めている。一方、*chinfrins* については文脈からすると、*meaningless* や *commonplace* で英訳する方が適切で、さらに言えば *worthless* の

方が望ましい」(Costa 2008: 168)と手厳しい。というのも、この方が成金資本家としてあらゆるものに付加価値を見出そうと固執するパウロ・オノーリオの無意識を強調するからだと言う。ちなみに、英訳(新訳)では、“hicks”、“mestizos”、“cheaply made sentences”が各々当てられている(Viswanathan 2019: 4-5)。この中で特に“mestizos”に関しては、旧訳よりも『サンベルナルド』の世界観を再現しようと意図された感じがしなくもない。日本語訳では、「田舎者」、「家僕」、「くだらない文章」とした。

コスタの指摘で特に重要な部分は「パウロ・オノーリオの無意識」であろう。本稿第3章とも関連するが、彼がどのような人物像なのかを把握し、可能な限り目標言語へと移さなければならず、ニュアンスを蔑ろにしない言葉選びが何よりも求められる。上記の英訳例と同じくこれを如実に示しているのが、次の一節である。

Ora vejam. Se eu possuísse metade da instrução de Madalena, encoivarava isto brincando. Reconheço finalmente que aquela papelada tinha préstimo.
(Ramos 1953: 11)

Think of it. If I had half of Madalena's education I could do this standing on my head. I've finally come to realize that all those books had their uses.
(Scott-Buccleuch 1975: 11)

“encoivarar”は「焼け残った木々を集める」を意味するが、慣用表現の“encoivarava isto brincando”は「朝飯前である／楽々とする」である。そのため、“I could do this standing on my head”とされた英訳は誤訳とは言えない。しかしながら、コスタは逆立ちする人物を描くような曲芸的效果を持っていると皮肉を込めて例え、「パウロ・オノーリオにおいて支配的なもの、すなわち、自らの目的を達成する上での時間に対する執着を見落としている」(Costa 2008: 168)とし、“I could put them together in no time”のような表現の方が文体

的にも効果的であったと結論づけている。日本語訳では、「朝飯前である」や「お茶の子さいさい」等はオノーリオらしさが感じられないと判断し、「それこそ造作もなくできたろうに」とした。コスタの考えに合わせて、「時間をかけずに」や「一瞬で」とする選択肢もあるかもしれないが、やや堅苦しい言い回しをする方を優先した。

次に小説の第3章へと入る。物語上では語り手が初めてパウロ・オノーリオという名前を名乗り、育ての親であるマルガリータ婆さんとの思い出などを語り出す。

O cego desapareceu. A velha Margarida mora aqui em São Bernardo, numa casinha limpa, e ninguém a incomoda. (Ramos 1953: 14)

The blind man is dead now, but old mother Margarida lives here in São Bernardo. (Scott-Buccleuch 1975: 13)

コスタは“is dead now”と“old mother”について、目標言語に配慮した工夫を肯定的に捉える一方で、翻訳するには難しい重要な文化的事物だと留意しつつ、原文の“casinha limpa”が英訳で言及されなかったことを「パウロ・オノーリオの人物造形の一部をなすが故に、翻訳を試みる価値はあったのではないか」と疑問を呈している。なお、英訳（新訳）では“Old Margarida lives here at São Bernardo, in a clean little house.” (Viswanathan 2019: 7) と訳出され、大きな違いとなっている。さらに見落としてならないのは、この“casinha limpa”にある縮小辞（-inha）で、ただ単に物理的に「小さな家」を意味するのではなく、恩人マルガリータ婆さんへの当て擦りが暗示されていることであろう。パウロ・オノーリオはこの文の直後で「週に十ミルヘイスかかるが、それは子ども時分の恩義を贖うには差し支えない額であろう」と心中を吐露しているように、自分勝手な基準で恩返しを数値化している。ただし、皮肉を説明的に訳し過ぎると原文の良さを損なうことに繋がる恐れもあることから、日本語

訳では、「盲人は姿を消したが、マルガリータ婆さんはサンベルナルドの小さい家に暮らし」として、育ての親に対する言葉遣いとして表面上は丁寧な響きがありつつも、この関係性では相応しくない表現を選んだ。

Numa sentinela, que acabou em furdunço, abreequei a Germana, cabritinha sarará danadamente assanhada, [...] Germana arruinou. Quando me soltaram, ela estava na vida, de porta aberta, com doença do mundo. (Ramos 1953: 14)

At a shinding that ended up as a free-for-all, I got an armful of Germana, a dishy mulatta, and pinched her ass a real treat. [...] Germana went to the bad. When I got out she was in the trade, door open and all clapped up. (Scott-Buccleuch 1975: 13)

翻訳が極めて難しいとされるのが“sentinela”である。コスタは文化的事物の問題を踏まえると、適切に英訳されているとはいい難いと鋭い言葉を向ける。マリーニョの語彙注釈に「埋葬または火葬に先立ち、親族や友人が故人のために行う儀礼。通夜」(Marinho 2018: 97)とあるとおり、ここは「通夜」にせざるを得ないと思うものの、「ブラジル農村部の一部における“sentinela”の世界は文化的雰囲気という意味でまさに例外的であり、等価性を求めるには翻訳上の相当な努力が要求される」(Costa 2008: 169)と忠告する。次の“cabritinha sarará”は登場人物ジェルマーナの特徴を表しているが、スペイン語では“una cabrita sarará” (Souza 2008: 149)と異化翻訳される一方で、イタリア語では“una mulatta dai capelli biondi” (Regina 2008: 179)のように北東部地方らしさが漂う“sarará”をあえて訳出せず、髪の毛の色を説明している。その点では英訳と類似しているかもしれないが、英訳(新訳)を見ると、“sarará”を残した上で、“a sarará, a blond mulatta, flirty as hell” (Viswanathan 2019: 8)と同格のコンマを使って訳出し、彼女の身体から醸し出される様子も含めている。

日本語訳では「色気のある混血の小娘」として、“sarará”のカタカナ等での表記も避けた。また、後半部の“arruinou”以下について、コスタは等価性のある翻訳ができていると称賛している。

第4章からは、宗教と度量衡、さらに比喻表現に関する事例を取り上げる。

Chovia que era um deus-nos-acuda. De manhã cedinho mandei Casimiro Lopes selar o cavalo, vesti o capote e parti. Duas léguas em quatro horas. O caminho era um atoleiro sem fim. Avistei as chaminés do engenho do Mendonça e a faixa de terra que sempre foi motivo de questão entre ele e Salustiano Padilha. (Ramos 1953: 22)

It was raining cats and dogs. Early in the morning I told Casimiro Lopes to saddle the horse, put on my riding cloak and set off. Seven and half miles in four hours. The road was just one long dog. I saw the chimneys of Mendonça's mill and the strip of land that was always a bone of contention between him and Salustiano Padilha. (Scott-Buccleuch 1975: 19-20)

“um deus-nos-acuda”について、マリーニョの語彙注釈では「無秩序、混乱、大騒動」(Marinho 2018: 99)と記述されているが、英訳ではその宗教的香りや地方色の豊かさが大きく損なわれ、お馴染みの表現が選ばれた。英訳(新訳)では“It was raining hard as God-help-us.”(Viswanathan 2019: 15)と翻訳されているので、旧訳よりも原文に近い。一方、宗教文化の異なる日本語では文字どおりに翻訳するわけにも行かず、「凄まじい程のどしゃぶりの雨」とした。次に、距離の単位を表す“Duas léguas”であるが、生活文化と強い結びつきのある度量衡は同化翻訳をすることで読者を驚かさせずに済む。したがって、コスタも「léguas を miles に置き換えることは到達テキストの読者にとって明らかに必要なことである」(Costa 2008: 172)と述べているが、距離や重さなどが推測可能であれば異化翻訳でも許容されるのではないだろうか。日本語訳ではそ

の点を考慮して「四時間で二レグア。道のりは始終ぬかるみだった」とした¹⁰。
3 つ目は字義どおりの“*motivo de questão*”に“*a bone of contention*”という比喩表現が使われた件で、コスタは起点言語が比喩表現ではなくとも、このように柔軟に翻訳することを好意的に受け止め、「*a bone of contention*」によって、訳者は『サンベルナルド』におけるグラシリアーノの言語精神に入り込み、本文脈における“*questão*”が有する係争中の意味を、より良く訳出できている」（Costa 2008: 172）と述べる¹¹。日本語訳では「絶えず揉めていた土地一帯」としたが、「揉めごとの種」のようにコスタの見解に倣うこともできたかもしれない。

以上のとおり、『サンベルナルド』の冒頭4章のみを対象として考察したが、組上に載せられなかったものが数多あることは言うまでもない。なお、レジーナ（Regina）はイタリア語版について、「北東部文化やその特性からは多少離れているとはいえ、原文テキスト及び読者の理解に相当寄り添ったものと見なせる」（Regina 2008: 179-180）と評している。グラシリアーノ・ハーモスは推敲を重ねて言葉に拘ったように、翻訳者もまたハーモス並みか、それ以上に訳文の是非に拘ることが求められるだろう。

3. パウロ・オノーリオの「声」を求めて

『サンベルナルド』は語り手パウロ・オノーリオが自伝執筆を通じて、自らの人生の意味を考える形式を採っている。「はじめに」で言及したように、語りの現在は50歳を迎えたオノーリオであるが¹²、物語の大半を占める回想では農園を手に入れるところからマダレーナとの出会いと結婚、そして狂氣的嫉妬により孤独に陥る過程が描かれる。翻訳ではその時々の中を汲み取って彼らしい日本語での言葉遣いを選択しなければならない。特に人称詞と文末詞は、人物像や話し相手との関係性への影響が大きい。金水が定義した役割語の中的人物像の例として、「年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等」（金水 2023: 203）が挙げられているが、パウロ・オノーリオをこれらの項目に当て嵌めると次のようになる。

年齢：50 歳

性別：男

職業：農園主

階層：地方有力者

時代：1920 年前後から 1932 年頃

容姿・風貌：白髪交じりの太い眉、髭に覆われた紅潮した表情

性格：実学志向、打算的、家父長的な支配欲の持ち主、嫉妬深い

さらに、生活空間（場所）を加えれば、「ブラジル北東部アラゴアス州内陸の片田舎」となるだろうか。そこでまず、パウロ・オノーリオの一人称代名詞を検討したい。小説の冒頭は以下のとおりである。

Antes de iniciar êste livro, imaginei construí-lo pela divisão do trabalho.

Dirigi-me a alguns amigos, e quási todos consentiram de boa vontade em contribuir para o desenvolvimento das letras nacionais. [...] **Eu** traçaria o plano, introduziria na história rudimentos de agricultura e pecuária, faria as despesas e poria o meu nome na capa. (Ramos 1953: 7)

ポルトガル語は主格人称代名詞を省略して動詞の活用形で一人称単数を表現することが可能であるため、自称詞 “eu” が現れるのは上記引用部では 3 行目（本文では 11 行目）となっている。

英訳では冒頭の一文目から、“Before beginning this book, **I** had the idea of putting it together by the division of labour.” (Scott-Buccleuch 1975: 8) というように“**I**”が登場し、英訳（新訳）に至っては“BEFORE **I** started this book, **I** thought division of labor was the way to go.” (Viswanathan 2019: 1) と、“**I**”が 2 回もある。日本語の場合、自称詞はある程度まで表に出さないまでも、文末表現などによって語り手の特徴（ここでは大人の男性であること）を表せるだろう。「男

ことば」としての自称詞には「俺、自分、僕、儂、私¹³」などがあり、これらがひらがなやカタカナで表記されると、そのニュアンスも変化して多様なキャラクター性を生じさせることもできる。そこで日本語訳では以下のとおりとした。

この自伝を執筆するに際し、私は作業分担から着手しようと考えた。友人たちに打診したところ、大半は国民文学の発展に寄与するだろうと快く受け止めてくれた。[中略] 私は構想を練り、本書の中に農業と牧畜の基礎を盛り込み、諸経費を払って、表紙に自分の名前を飾る手筈とした。

原文に自称詞が現れるまでには数行を要するが、“*imaginer*”という活用形によって一人称の語りであることは確定するため、冒頭に「私」を明示した。引用部に「農業と牧畜の基礎を盛り込み」とあるように、パウロ・オノリーオは実用的な知識を重宝する一方で、マダレーナの教養を無駄なものとして切り捨てる人物であるから、一見するとかしこまった言葉遣いは似つかわしくない。しかしながら、彼女の死後に遺書である手紙を読んだとき、「飛ばしながら読むと、半分あまりしか理解できなかった。自分が無知なせいで避けてきた難解な言葉に度々出くわしたから」(Ramos 1953: 173)と後悔を滲ませ、また自伝執筆を決意しながら書きあぐねていた際にも、「私がマダレーナの教育の半分でも享受していれば、それこそ造作もなくできたろうに。あの膨大な紙の山は有益だったと認めざるを得ない」(Ramos 1953: 11)と心苦しい思いを吐露しているため、改まった心境にあると判断してオノリーオの自称詞を「私」に落ち着けた。というのも、「おれ、おまえ、ぜ、ぞ」などの従来の「男ことば」はもとより、若くて気さくな外国人男性の発言の翻訳に出る「やあ、ぼく、さ、かい、だい」のような「翻訳版男ことば」¹⁴ (中村 2025: 71-72)とも異なるからである。マダレーナとの出会いを回顧する場面でも、「でも、迷いはない。マダレーナのために、特別な一章を設けようではないか」(Ramos

1953: 79) と、ネクタイを締め直すかのように読者に語りかけている。

語り手パウロ・オノーリオとは対照的に、登場人物としての彼には冷徹な残酷さと狂気的な言動という二面性が垣間見られる。たとえば、領地を巡って争っていた宿敵メンドンサ農園主が暗殺された場面では、シルヴェストレ神父と建設予定の教会について町で会話を交わしている。

— Que horror! exclamou padre Silvestre quando chegou a notícia. Êle tinha inimigos?

— Se tinha! Ora se tinha! Inimigo como carrapato. Vamos ao resto, padre Silvestre. Quando custa um sino? (Ramos 1953: 36)

英訳では‘How terrible!’ said Father Silvestre when they brought the news. ‘Did he have any enemies?’/‘Enemies! Did he have any enemies! As thick as lice. Well, what about it, Father Silvestre? How much did you say a bell costs?’ (Scott-Buccleuch 1975: 30-31) となっており、過不足のない妥当な翻訳と言える。ただし、日本語訳では、原文にも英訳にもある感嘆符を削除した。

「これは酷い」事件が報じられるや、シルヴェストレ神父が声を上げた。「メンドンサさんに遺恨を抱く者でもいましたか？」

「いやはや、そこら中に。ダニ同然の怨敵たちが。シルヴェストレ神父、話を続けましょう。鐘はおいくら程になるでしょうか」

パウロ・オノーリオの台詞では疑問符も取り除いて、殺人事件の一報を意に介さず、平然とした様子を出した。このような慇懃な言動は、結婚前のマダレーナや彼女の伯母グローリアさんに対しても同様で、たとえば「言い出しにくいことですが、ご理解いただけないとなると……。ともあれ、前置きはこれくらいにして、腹を割って洗いざらい申し上げましょう」(Ramos 1953: 88) や、「グローリアさん、私とあなたの姪御さんは一週間以内に一緒になり

ます。正確に申し上げると、結婚します」(Ramos 1953: 94) という具合である。伯母に対する「正確に申し上げると」の部分は、原文では“*Para usar linguagem mais correcta*” (Ramos 1953: 94)、英訳でも“*Or, to put it more correctly*” (Scott-Buccleuch 1975: 78) であるが、日本語訳では謙譲語を使うことで関係性を明確にした。

しかし、サンベルナルドの農園主として支配力を強めながら、マダレーナとの結婚後は彼女の価値観との齟齬に戸惑いを覚えるようになり、嫉妬も相俟って徐々に暴力的な人格を露呈させる。次は、パウロ・オノーリオが使用人マルシアーノを怠け者だと罵って殴り倒したところで、それを目撃したマダレーナが「でも、酷すぎるわ。どうしてあんなことをするの？」(Ramos 1953: 112) と咎める場面である。

— Fiz aquilo porque achei que devia fazer aquilo. E não estou habituado a justificar-me, está ouvindo? Era o que faltava. Grande acontecimento, três ou quatro muxiões num cabra. Que diabo tem você com o Marciano para estar tão parida por ele? (Ramos 1953: 112)

英訳では“I did it because I thought I ought to do it. And I’m not in the habit of justifying my actions, you understand? That’s all that was needed!” [...] (Scott-Buccleuch 1975: 92) として、原文にはない感嘆符を追加し、苛立ちを抑えきれないパウロ・オノーリオの感情を表している。英訳の引用は後半を省略したが、原文の日本語訳は次のとおりである。

当然のことだ。それに、いちいち弁解などしない。分かっているだろう。やらないといけないのだ。男を三、四発殴ったくらい、大したことじゃないだろう。どうしてそこまでマルシアーノの肩を持つのか？」

「酷すぎるわ。どうしてあんなことをするの？」というように、マダレーナにはある程度の「女ことばの文末詞」を使わせた。翻訳小説における女らしい言葉遣いについてはジェンダーの観点から批判的な意見もあるが、『サンベルナルド』におけるマダレーナは、旧態依然とした家父長制社会の中で抑圧された女性の立場を象徴しているからである。彼女が教育の重要性や貧困者への慈悲を訴え続け、パウロ・オノーリオの価値観を揺さぶり続けたため、日本語訳での口調は一貫させた。それとは反対に、夫オノーリオの言動にはその揺らぎが狂気となって表面化する。マダレーナの手紙の切れ端を拾ったパウロ・オノーリオは、教会から姿を見せた彼女を再び中へと連れて行き、誰宛ての手紙なのかを執拗に問い質す。

— Mas a carta?

Madalena apanhou o papel, dobrou-o e entregou-mo:

— O resto está no escritório, na minha banca. Provavelmente esta folha voou para o jardim quando eu escrevi.

— A quem?

— Você verá. Está em cima da banca. Não é caso para barulho. Você verá.

— Bem.

Respirei. Que fadiga!

— Você me perdoa os desgostos que lhe dei, Paulo?

— Julgo que tive as minhas razões.

— Não se trata disso. Perdoa?

Rosnei um monossílabo.

— O que estragou tudo foi esse ciúme, Paulo. (Ramos 1953: 167)

パウロ・オノーリオの台詞部分の英訳は、‘But the letter’／‘Who to?’／‘Very well.’／‘I think I’ve had my reasons.’となっている。一方でマダレーナの発言は、‘The rest of it is in the office on my desk. Probably this sheet blew into the garden

while I was writing.’／‘You’ll see. It’s on top of the desk. It’s nothing to make a fuss about. You’ll see.’／‘Will you forgive me the unhappiness I’ve caused you, Paulo.’／‘That’s not the point. Will you forgive me?’／‘What ruined everything was this jealousy of yours, Paulo.’（Scott-Buccleuch 1975: 134-135）と翻訳された。

上記引用部では、本稿の前章で考察した北東部固有の慣用表現はなく、英訳においても適切に翻訳されている。ただし、結婚前後で人間性の変わるパウロ・オノーリオと、終始ぶれることのないマダレーナの各々の言葉遣いについては、役割語を意識した日本語訳を試みるべきであろう。

「だが、手紙は？」

マダレーナは便箋を手に取り、それを畳んで差し出した。

「残りは書斎の、わたくしの机の上にあります。この便箋は手紙を書いていた時に風に飛ばされたのでしょうかね」

「誰に宛てたものだ？」

「見れば分かるわ。机の上にあるから。騒ぎ立てることじゃないのよ。見れば分かるわ」

「そうか」

ふっと息を吐いた。何とも手間が掛かる。

「パウロ。あなたに嫌な思いをさせてしまったこと、許してくれるかしら？」

「私にも自分なりの理由があったと思う」

「そんなこと言っていないのよ。許してくれるの？」

私はしどろもどろに呟いた。

「全てを台無しにしたのはね、その嫉妬なのよ、パウロ」

ぞんざいな話しぶりのパウロ・オノーリオに対して、マダレーナの言葉には女ことばの文末詞を施しつつ、丁寧な言い方も織り交ぜている。それは弱い立場に置かれながらも、初志貫徹したマダレーナの姿勢があったからであ

る。一方で、彼女が夫にぶつけた最も不穏な言葉は「人殺し！」(Ramos 1953: 145)であったかもしれない。農園主メンドンサの殺害にパウロ・オノーリオが関与していたことを匂わせる罵倒だが、彼は「しかし、『人殺し』だけは意味があった。それこそ、私が悩まされていたものだ。繊細な生き物たる女は、男の問題に首を突っ込むべきではない」(Ramos 1953: 145)と頭の中で反芻するものの、まともな結論を出さずに切り捨ててしまう。

おわりに

小説『サンベルナルド』の語り手パウロ・オノーリオの「声」は欧米各国語にすでに翻訳され、専門家らの間でその一長一短について議論が重ねられて来た。文法や語彙が比較的近いスペイン語をはじめとするロマンス諸語においても、グラシリアノ・ハーモスの磨き抜かれた文体とブラジル北東部地方のローカル性は翻訳にとって大きな壁となって立ちはだかり、訳者も推敲の過程で一方ならぬ苦勞を味わったことが分かる。本稿では語り手の「声」を解剖すべく、翻訳理論と役割語の概念を援用しながら、とりわけ独特な慣用表現や人物像を把握した上で「パウロ・オノーリオは日本語で語れるのか」という問いに答えることを試みた。

同化翻訳と異化翻訳については、一つの作品の中で適宜使い分けるしかない。人種関係や宗教、動植物、度量衡などを取り上げて各国語の翻訳事例を考察したが、どちらの翻訳にすべきかは唯一無二の正解があるわけもなく、そのつど訳者の判断に委ねるほかないものの、だからこそ可能性は無限にある。さらに、本稿では詳細に検討できなかったものの、新旧の英訳を比較することもできた。『サンベルナルド』の場合は新訳において、たとえば“sarará”のように旧訳では削除された語彙を残し、同格で説明を加える手法を見た。この小説に込められた作者グラシリアノ・ハーモスの意図を汲んだ翻訳の一例である。日本語訳ではルビを打つことなど工夫できたかもしれないが、蛇足になる恐れもあって説明的な訳文にする方を選んだ。

役割語と翻訳の研究に関しても、金水が唱え始めた2000年からもう四半世

紀も経つわけだが、依然として盛んに行われている。それは言語というものが文化とは切り離せないものであり、ジェンダー等のイデオロギーも固定的なものではなく、ますます急速に変化しているが故に、すぐにまた新たな解釈が求められるからであろう。同分野の研究では、文学作品のほか、マンガやアニメ、映画、新聞記事等も積極的に題材とされることが増え、メジャー言語に留まらず、ポルトガル語関連の研究成果も発表されている¹⁵。

パウロ・オノーリオが語る共訳『サンベルナルド』の日本語は理想的なものとは程遠いかもかもしれないが、様々な先行研究を踏まえたものであり、“らしさ”は出せているものと自負している。グラシリアノ・ハーモス風に語れば、『サンベルナルド』が刊行された暁には、日本におけるブラジル文学の普及と研究の深化に必ずや貢献できるであろう。

注

¹ 本稿は日本ポルトガル・ブラジル学会（AJELB）の2024年度大会における共同発表「パウロ・オノーリオは日本語で語れるのかーグラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』の試訳から」をもとに、筆者が単独で再構成の上、加筆修正したものである。

² 京都外国語大学外国語学部ブラジルポルトガル語学科講師。

³ 2023年に没後70周年を迎えたグラシリアノ・ハーモスの作品は、同国の著作権法（第41条）が定めるとおり著作権保護期間が終了し、2024年1月1日からパブリックドメインとなった。これまで邦訳された長篇小説には1938年に刊行された『乾いた人びと（*Vidas secas*）』（高橋都彦訳、水声社、2022年）がある。

⁴ フェリッペ・モッタとの共訳『サンベルナルド』は、2026年3月に春風社から刊行される。なお、同書からの引用は共訳書に基づくが、それ以外のものは筆者による翻訳である。

⁵ たとえば、三島由紀夫『仮面の告白』（1949年）の「大正十四年の一月十四日の朝、陣痛が母を襲った」はポルトガル語版（Jaqueline Nabeta 訳、2004年）で“*Na manhã do dia 14 de janeiro de 1925, as dores do parto a acometeram.*”（*Confissões de uma máscara*, p.10）と翻訳されている。下線は引用者によるもの。

⁶ たとえば、村田沙耶香『コンビニ人間』（2016年）の「いらっしやいませ、こんにちはー！」はポルトガル語版（Rita Kohl 訳、2019年）で“*Irasshaímasê, bom dia!*”（*Querida*

Konbini, p.112) と翻訳されている。下線は引用者によるもの。

⁷ ブラジル文学史上、最高峰の作家に位置付けられるマシャード・ジ・アシス (Machado de Assis: 1839-1908) のこと。

⁸ 18歳のときに刑務所で字の読み書きを覚えたパウロ・オノーリオは、無教養な人間ではない。確かに、師範学校を出て教師をしていたマダレーナの教養には劣るとして、「私がマダレーナの受けた教育の半分でも享受していれば、それこそ造作もなくできたらうに」(Ramos 1953: 11) と言うが、農業や牧畜などについては「姪御さんとあなたが大いに稼げる手立てをお教えしましょう。それは養鶏です」(Ramos 1953: 77) とマダレーナの伯母グローリアに語っており、一定の学びを通じて実用的な知識を豊富に有している。

⁹ 単に「英訳」とする場合、本稿では旧訳を指す。新訳からの引用は「英訳 (新訳)」と表記した。

¹⁰ 1 レグアは 6.5km 程であるため、ここでは約 13km である。7.5 マイルは 12km 相当のため大差ないものの、英訳 (新訳) では 6 マイル (約 9.6km) と短くなっている。

¹¹ あるいは反対に、起点言語の比喩表現を目標言語において字義どおりに翻訳することもあり得るとしている。

¹² 小説の最終章である第 36 章には、「馬齢を重ねた。聖ペドロの日の前後に五十歳を迎えた。救いの余地のない五十年。目的もなく浪費した五十年」とあり、作品の冒頭と結末が繋がっていることが分かる。

¹³ 「わたし」あるいは「わたくし」と読める。金水敏編『〈役割語〉小辞典』によると、わたくしは『「わたし」よりさらに改まった、あるいはへりくだった場面で用いる表現』とある。(金水編 2014: 204)

¹⁴ 翻訳版男ことばの典型例として、「やあ、ジョン。ぼくは、マイケルさ。元気がいい」という文が挙げられ、気さくさ、親しさ、こだわらなさを持った人物像を表すとしている。(中村 2025: 72)

¹⁵ デ ナザレ フィゲイラ、フラヴィオ (2024 年) 「日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳における『役割語』翻訳の手法: 『田舎ことば』を例として」『言語・地域文化研究』30 巻、東京外国語大学大学院総合国際学研究所、pp.233-250.等がある。

参考文献

- ヴェヌスティ、ローレンス（秋草俊一郎・柳田麻里訳）（2022 年）『翻訳のスクランダル』フィルムアート社（原書刊行 1998 年）
- （鳥飼玖美子訳）（2021 年）「ユーモアを訳す—等価・補償・ディスコース—」、鳥飼玖美子ほか編『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房
- 金水敏編（2025 年）『役割語とキャラクター——ポピュラーカルチャーをより深く理解するために』研究社
- （2014 年）『〈役割語〉小辞典』研究社
- 金水敏（2023 年）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 中村桃子（2025 年）『翻訳から広がる日本語 女ことば・男ことば・疑似方言』白澤社／現代書館
- 古川弘子（2024 年）『翻訳をジェンダーする』筑摩書房
- Costa, Luiz Angélico da, 2008, “*São Bernardo* em tradução para o inglês”. In: Denise Scheyerl & Elizabeth Ramos (orgs.) *Vozes, olhares, silêncios: diálogos transdisciplinares entre a linguística aplicada e a tradução*. [online] EDUFBA, Salvador. pp. 165-174.
- Marinho, Clécia Maria Nóbrega, 2018, “O léxico regional/popular de Graciliano Ramos em *Caetés*, *São Bernardo* e *Vidas secas*: uma análise léxico-semântica”. [Tese de Doutorado]. João Pessoa.
- Melo, Rafaela Marra, 2019, “O pobre-diabo no centro do palco narrativo: uma leitura comparatista entre Dostoiévski e Graciliano Ramos”. [Dissertação do mestrado]. UFMG, Belo Horizonte.
- Miranda, Wander Melo, 2004, *Graciliano Ramos*. Publifolha, São Paulo.
- Moisés, Massaud, 2000, *História da literatura brasileira – Modernismo*. 4ª ed., Cultrix, São Paulo.
- Moraes, Dênis de, 2012, *O velho Graça: uma biografia de Graciliano Ramos*. Boitempo, São Paulo.
- Ramos, Elizabeth, 2008, “*São Bernardo*: releituras de uma história de bichos”. In: Denise

- Scheyerl & Elizabeth Ramos (orgs.) *Vozes, olhares, silêncios: diálogos transdisciplinares entre a lingüística aplicada e a tradução*. [online] EDUFBA, Salvador. pp. 157-164.
- Ramos, Graciliano, 1982, *Cartas*. Recordo, Rio de Janeiro.
- , 1953, *São Bernardo*. José Olympio, Rio de Janeiro. (英訳 : Scott-Bucleuch, R. L., 1975, *São Bernardo*. Pete Owen, London. / 英訳 (新訳) : Viswanathan, Padma, 2019, *São Bernardo*. NYRB, New York. / 邦訳 : 岐部雅之・フェリッペ・モッタ共訳, 2026 年, 『サンベルナルド』春風社)
- Regina, Silvia La, 2008, “San Bernardo: os tradutores invisíveis”. In: Denise Scheyerl & Elizabeth Ramos (orgs.) *Vozes, olhares, silêncios: diálogos transdisciplinares entre a lingüística aplicada e a tradução*. [online] EDUFBA, Salvador. pp. 175-180.
- Souza, Cecilia Gabriela Aguirre, 2008, “Tradução entre línguas próximas: o São Bernardo em espanhol.” In: Denise Scheyerl & Elizabeth Ramos (orgs.) *Vozes, olhares, silêncios: diálogos transdisciplinares entre a lingüística aplicada e a tradução*. [online] EDUFBA, Salvador. pp. 145-156.